

「ビクター」の犬の絵本について

多摩支部 吉岡定江

読売新聞 2020年7月29日の記事にこんな話題がありましたので、浅見支部長に送りました。

「ビクター」の犬の絵本

亡きご主人様との悲話



① “HIS MASTER'S VOICE”

突然ですがクイズです。このマーク＝写真①は何でしょう？ 一目瞭然と問題にならないって!? では、この犬の名前は何か？ 書き添えられた「HIS MASTER'S VOICE」の意味は？ そして番音器で一体何を聴いているのか……？ その答えを教えてください。その絵本が発売されました。

(清川仁)

では、解答編です。この犬のマークはレコード会社「ビクター」が長年使用しているロゴマーク。犬の名は「ニッパー」といいます。イギリスに実在した犬なんです。日本では、忠犬八子公が有名ですが、「HIS

MASTER'S VOICE」＝「彼の主人の声」との文字から分かるように、やはり飼い主との悲話があるのです。

石浦寛さんが描いた絵本「NIPPER—His Master's Voice—」(JVCネットワーク)

＝同②のあらすじを紹介すると——。舞台はイギリスのある町。ニッパーはご主人様と奥さん、2人の子ともたちと仲良く暮らしていました。家族の何よりの楽しみは、番音器から流れるすてきな音楽をみんなで聴くこと。幸せな日々を過ごしていた家族でしたが、ある日のこと、ご主人様が重い病気に罹り、天国へ旅立ってしまいます。これがきっかけで家族は離ればなれになってしまいました。

ニッパーは、ご主人様の第、画家のフランシスに引き取られますが、大好きだったご主人様がいなくて、ずっと寂しそうにしています。そんな中、フランシスは1枚のレコードを見つけます。それをかけると、ニッパーはすぐさま番音器に駆け寄ってききました。流れてきたのは、ご主人様の声だったのです。

レコードを聴いて、ニッパーの脳裏には家族との思い出が次々に浮かんできます。そんな見開きのページ＝同③が涙を誘います。犬にも、家族の声は届いているのでしょうか。

絵本のストーリーは実話をアレンジしていますが、実際に犬の原画は1889年、イギリスの画家、フランシス・バラウドが兄の声に聴き入るニッパーの姿に感じ入って描いたものです。最初の絵はシリンドラー(円筒)式の番音器でしたが、円盤式番音器を

発明したベルリナーが商標として採用することになり、描き換えられたのだそうです。今やスマートフォンでどんな音楽も聴き放題という時代だからこそ、レコードが発明された頃の話を聞くことに意味があるように思えます。音楽や人の声を刻み込む

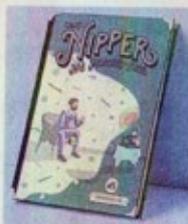


③

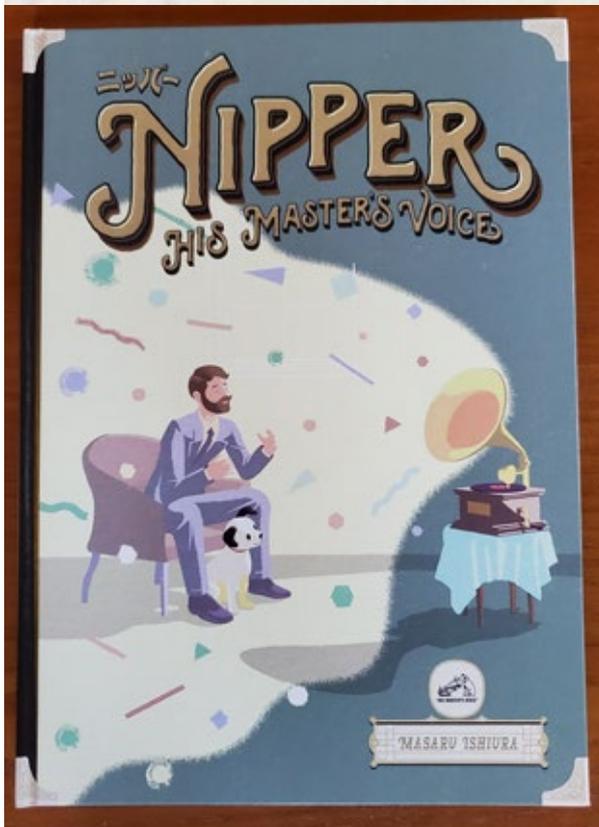
とができるメディアのありがたさ。主人がこの世にいても、その声は記録されて繰り返し聴くことができるのです。実際、古いレコードにはこうした人の会話や演説など、音楽以外の記録も多いのです。

コロナ禍によりライブ開催が難しい時代になりましたが、「おうち時間」は録音芸術の価値を見直す好機ともいえるのではないのでしょうか。ちょうど、NHK連続テレビ小説「エール」が放送され、番音器やレコード文化に注目が集まっています。改めて、このロゴマークに込められた思いを感じ取ってみませんか。

ちなみに、レコードショップ「HMV」の名称も、「HIS MASTER'S VOICE」の略なんですよ。



②



それからご主人さまのレコードをかけるたび、ニッパーは番音器のとなりに寄り、耳をたたくました。その家にしきられたフランシスは、ニッパーの様子を絵にしました。

発売元：株式会社 JVC ケンウッド・ビクターエンタテインメント

ビクターマークの由来にストーリーを脚色してソフトな絵物語になっています。

以上